



お泉水

題字 福井大学長 清水英夫

No. 3 1973. 6. 20 福井県図書館協会報

福井市宝永3丁目・県立図書館内 県図書館協会発行

お泉水と才媛

養浩館あと通称お泉水と親しまれている泉水邸は、福井藩主の別邸であった。第三代藩主忠昌が築造し、更に第7代藩主吉品が之を拡張したが、第9代藩主宗昌以降に侍屋敷として家臣に賜わるなどして縮小され、現在の規模になったものである。戦災に依り由緒ある養浩館の建物も名木も焼失し、さすがの名園も其の名残りを止めるだけに過ぎなくなった。

此の庭園に「むらさきしきぶ」という優美な名の木がある。秋に紫色の果実が熟するので、才媛紫式部の名をかりたのだというが、かつて此の屋敷地内に住んだ佳人達を偲ぶにふさわしい木でもある。

現存するお泉水の西方、警察機動隊のあるあたりは、元和八年忠直が成敗し取り潰した永見右エ門の屋敷跡であり、吉品が大飢饉の貧民救済のためとか、あるいは家老の別邸を所望したが断わられたためとかで拡張した新泉水邸の敷地の一部である。右エ門は知行15,350石の高い家柄で、其の父は秀康に殉死したが、其の母は非常に美人であったと見え、夫の殉死後十年余に至っても忠直は側室として召し出そうとした程の熱心ぶりである。彼女は貞婦二夫にまみえずと言って之を拒否し、髪をおろして尼になったので、怒った忠直は右エ門一族を攻め滅したという。夫は主君に殉死し、自らも子ともども主君に攻め滅ぼされ、美貌貞節なるが故に彼女は悲運な一生を送った女性であった。

会長 児島幸男

天保年間初頭に、第14代藩主齊承の生母貞照院が、泉水邸の西側（現テニスコート付近と思われる）を住居として使用したことがある。彼女は、両国あたりの茶店の小女であったとか、あるいは芸者あがりだとか言われ素性ははっきりしないが、水商売あがりのすこぶる美人であって、ある要人の妾であったのを第13代藩主治好が見染めて側室にしたといわれている。非常に利口な方でもあり、春岳は藩主のあり方などを教えられて感心したと述べている程である。藩の経費節約策のため、子の齊承の死後、江戸を離れて馴れぬ福井での生活を始めたが、望郷の念にかられてことあるごとに江戸に帰ることを願出るが許されなかった。

彼女の屋敷は広大で立派であったし、何の不自由もなかったが、江戸の生活に馴れた彼女にとって、泉水屋敷の日々は淋しいものであったようだ。亡夫第17回忌法事執行を理由に天保12年江戸に帰り、再び屋敷には戻って来なかった。彼女も又才媛であったが夫と子供に早く先立たれた不運な女性であった。そして奇しくも二人共新泉水邸の敷地内に居住した女性だったのである。

今年も6、7月になるとお泉水の「むらさきしきぶ」は、多数の淡紫色の小さな花を群りつけ、秋には優美な紫色の果実を見せて呉れることであろう。そして私は不運だった佳人達をしのびながら庭内を歩くことが日課になるのである。

三国町立図書館の紹介

■はじめに 三国町立図書館が中央公民館から分離して独立(条例化)したのは昭和36年7月13日である。独立はしたものの46年までは中央公民館(三国町台16番地)と居を共にして仕事を進めてきた。やがてこの地に、それまでの木造旧建物をとりはらい、完全独立の図書館を新築する計画がたてられ、昭和47年4月に起工、同年12月末に鉄筋コンクリート造り3階建ての現在の図書館ができたのである。その工事期間、すなわち47年の1年間は、三国町社会福祉センターに間借りをして開館していた。なお、現在の新図書館の開館は、本年1月5日からである。

■建物の概要 敷地は、さきへのべたとおり三国中央公民館(旧役場・木造)を取りこわし、隣接民家の宅地2戸分を買収拡張して842.95平方メートル(約255坪)を確保し、建設費6,877万円(ほかに備品費700万円)を投じて、47年12月末に工事の一切を完了した。

建物の総面積は1,037.571平方メートル(約313.865坪)であって、各階の概要は次のとおりである。

- 1階 367.408平方メートル(約111.141坪)
開架式書庫・児童閲覧室・新聞雑誌閲覧室・事務室・用務員室など
- 2階 343.370平方メートル(約103.84坪) 学習室A、B・講義室・展示室開架式書庫・プリント室・開架式(手動式)書庫など
- 3階 284.706平方メートル(約86.124坪)
大会議室・大、小和室など
- 屋上 42.087平方メートル(約12.731坪)
ボイラー室

■蔵書その他 図書館職員は、館長以下7人(男子3・女子3・用務員1)である。

蔵書数は、町蔵書13,456冊+県配本2,794冊+旧教科書類886冊=17,136冊である。(昭和48年3月末現在) 近き将来(5年計画)3万冊にすべく努力中である。

なお、年間の図書購入予算は約150万円である。

■B・M(移動図書館 くずりゅう号)

昨47年4月マイクロバス型移動図書館車1台を272万円を整備購入し、同年5月から巡回を開始した。車内に約1,000冊を積載し、中心部を除く町内周辺部6地区、50ステーションを、月に2回ずつ巡回し、1か所20~50分間停車して図書の貸出しを行なっている。登録・貸出その他のシステム、手続きはすべて本館と共通で、利用者へ便利がられている。

■利用状況

(イ) 入館者数



児童閲覧室<三国町立図書館各階平面図>

1日平均126人(本年1月~3月の入館者数を開館実数日で割る)

(ロ) 図書貸出登録者数(3月末現在)

	一般	学生	児童	計
本館	365	321	445	1,131
B M	711	169	570	1,450
計	1076	490	1,015	2,581人

(参考・町人口21,908人)

(ハ) 貸出状況 3月における図書貸出しは、本館では1日平均168冊、BMでは1日平均108.8冊となっているが、本年1月~3月の貸出状況の詳細は下表のとおりである。

★本館

●分類別貸出状況

分類 月	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	j	其他	計
1	0	14	50	29	18	11	10	19	0	555	1,025	12	1,743
2	6	14	64	35	15	39	13	26	1	779	1,794	13	2,799
3	7	16	71	59	24	17	8	34	3	997	2,712	10	3,958

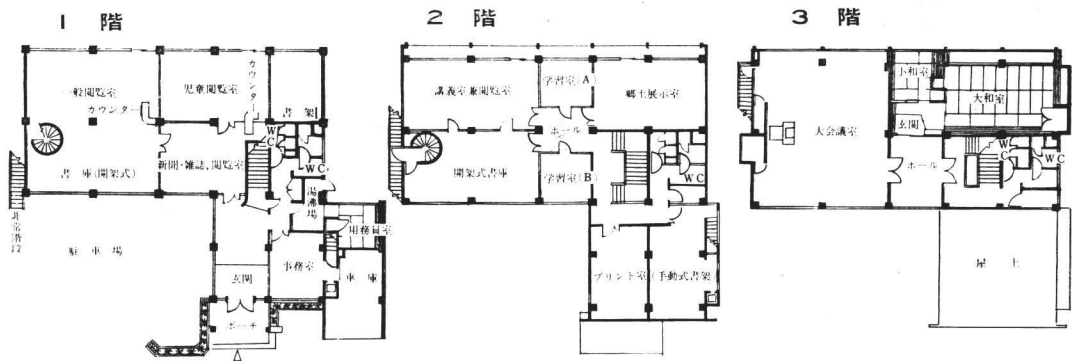
●階層別貸出状況

種別 月	一般男	一般女	学生男	学生女	児童男	児童女	計	開館 日数	1日 平均
1	260	258	144	125	333	623	1,743	20.5	58
2	312	378	185	199	629	1,096	2,799	21	133.5
3	328	356	304	342	990	1,638	3,958	23.5	168

★BM

●分類別貸出状況

分類 月	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	j	計
1	5	18	27	37	11	21	9	4	2	521	598	1,253
2	0	23	37	54	16	33	4	3	0	529	617	1,316
3		24	26	43	15	30	9	1	0	463	694	1,305



■おわりに 館内施設として、2階に学習室2室を開けたことは効果的であった。一室8席、計16席であるが、ことし2月3月の受験期には高校・中学生が終日これを利用し、毎日満席のため、となりの講義室や展示室も開放して学習用にあてねばならない状況であった。また、3階に大会議室・大和室を設け、公民館活動や社会教育関係会合に利用してもらっているが、これがまた連日連夜使用申込みが殺到し、1日平均2.5の会合に利用されている。使用はすべて無料であるが、使用許可は社会教育法第23条の条項に準じている。

本館の活動とBMの巡回を平行して行なうことは、町民へのサービスの平等を期するうえにぜひ必要なことで

●階層別貸出状況(BM)

種別	一般男	一般女	学生男	学生女	児童男	児童女	計	巡回日数	1日平均
1	205	467	32	37	205	307	1,253	12	104.4
2	229	483	28	41	217	318	1,316	12	109.5
3	221	426	43	38	225	352	1,305	12	108.8

あり、BMの巡回によって読書人口が倍増したことは、その効果を実証しているといえよう。以上が三国町立図書館の施設を中心にした紹介で、館内外の活動状況については紙面のつごう上省略する。

県立図書館の近況

県内の古文書所在調査

1. 古文書調査の目的

福井県下には約1,200家の古文書所蔵者がいるものと予想され、その量は10万冊を下るまいといわれている。

しかし、近年農漁村の過疎化現象、あるいは生活様式の激変といった社会状況のもとで古文書の移動、散逸が著しくすすみ、識者の間でその将来が憂慮されている。

このような古文書の散逸を防止するためには公的機関が積極的にその対策を構じなければならない。しかし、当県にははしかるべき機関もないため、当館がその役割を代行している。散逸を防ぐためにはまず県下における古文書の分布状況を明らかにしなければならない。当館が古文書の所在調査をおこなうのはそのためである。

古文書調査の実施にあたっては、これまでおこなわれた調査の成果を十分に利用し、効果的にすすめるべきではない。過去における県下の古文書調査の代表的事例をあげるならば、最初の総合的調査としては大正年間(大正5~9年)に福井県史編纂事業の一環として実施されたものがあり、戦後のものでは京都大学国史研究室の

調査(昭和35~43年)がある。

今回の調査の目標は前記の調査の実績を活用しながら、さらに新史料を発掘してそれを増補し、また、全史料の追跡調査をすすめて古文書の散逸の状況を明らかにすることにある。あわせて調査の過程において散逸の虞れある史料等が判明した場合、それらを購入・寄贈等の方法で吸収したり、あるいはマイクロ撮影を実施することによって当館郷土資料の充実をはかることも企図している。

2. 調査計画

焦眉の急である県下全域の古文書所在調査は、昭和46年度から3カ年計画ではじめられた。調査経費の主なもの調査員の手当および旅費であるが、1名につき月額で手当2,000円、旅費2,000円を計上している。

調査員は旧郡単位で区画された10の調査区毎に1名を配置している。調査員は主として古文書調査には経験豊かな高校教員をもってあて、担当区内に自宅もしくは動

(以下5頁へ)

県立図書館の近況

利用者の立場から

一近代経済史の資料を中心として一

福井県立羽水高校 末 広 要 和

日本近代史という学問の世界にも、古いカラを破るようなダイナミックな動きが胎動しつつある。最近の日本近代史の、それも比較的若手の研究者の仕事に接する時つくづくこの事を感じる。そうして、この新しい波動の依ってきたる始源を考えると、その少なからざる部分が、出版界における技術革新に負っていることに気づく。いわゆる「複製本」ブームがこれである。近代経済史の資料に限ってみても「明治前期財政経済史料集成」や「明治前期産業発達史資料」等々の複製を直ちにあげることができる。このような歴大な複製資料に支えられた研究が出はじめていたのである。

ところで、これらの複製資料は、シリーズによっては数百冊に及ぶものもあり、到底、個人の蔵書とすることはできず、図書館の機能に期待せざるを得ないわけである。ところが、地方にあっては、公共図書館も大学図書館もいたって貧弱で、予算や人的サービスの面で、ただちにこの時代の動きに対応できない。卑近な例で恐縮するが、先年、勤務校の研究集録に「物産表にみる幕末、明治初年の福井県」という粗雑なノートを発表した。参考資料のうち、かなりのものは県内に複製本すらなく、京都や東京へ出向かなければならぬ次第であった。

先日、県立図書館へ行ったら、私がかつてみたいと念じていた複製資料がかなり大量に揃えてあるのを見ることができた。卒直に言って、大変嬉しいという気持ちと、乏しい予算の中で随分無理してるな、という感を禁ずることができなかった。

ここでは、最近県立図書館の蔵書となったものの中から、近代経済史の複製資料に限って2、3のものを紹介しておきたいと思う。

さて、日本における封建制から資本主義への転換は、列強の圧力と明治政府の殖産興業政策によって強行されるが、「明治前期財政経済史料集成」は、この大転換の諸施策を、大蔵省・農商務省等の資料によって跡づけている。松方伯財政論策集、歳入出決算報告書（明治元年～18年）、地租改正報告書、秩録処分・藩債処分・貨幣制度関係諸資料、会社全書（為替会社の顛末）、興業意見（明治17年前後の各府県の産業の実態と振興業）、等が集録されている。

また明治十年代にいたる本源的蓄積過程は、日本の産

業や社会に嵐のような構造変化をひきおこしていくが、この激動期の諸産業の動向を豊富な資料で教えてくれるのが「明治前期産業発達史資料」である。府県物産表・全国農産表・農産表（明治6年～15年の諸統計）、内国勸業博覧会報告書、同出品解説、綿糖共進会報告書、繭糸織物陶器共進会審査報告、農商工公報、農商工概況、商況年報、勸業年報、府県地租改正紀要、各県の農事調査書（但し、福井県は未収録）等々を含み、明治末、大正初期に至る産業資料の大集成で約300冊、時価200万円に近いものである。

以上の資料と関連し、府県統計書が全国的に出揃うのが、明治14、5年で、「帝国統計年鑑」は、この府県統計書を基礎に、諸官庁の統計をも合せた全国統計として明治15年に成立する。この近代経済史研究に不可欠の年鑑も、地方では閲読不能のものであったが、今では複製版等で、そのすべてを県立図書館で閲覧することができる。

また、戦前型日本資本主義の基底的条件であった地主小作関係の究明に欠くことのできない「農地制度資料集成」も、地租改正から農地改革に至る、農業問題、農業政策について広く資料を集めている。

明治財政史編纂会「明治財政史」は財政面から日本近代史を見据えるのに、貴重な資料を提供してくれる。以上、紹介の余白が乏しくなってきたが、経済史以外のものでも「日本庶民生活史料集成」、維新史料の「日本史籍協会叢書」（全192巻）等を擁し、更に近世史料に目を向ければ、「日本経済大典」（全60巻）「近世地方経済史料」「日本財政経済史料」「日本経済叢書」等々が所蔵されていて、県立図書館の最近の充実ぶりに、認識をあらたにした次第である。

しかし、知識社会とか情報化社会とかと騒がれ、歴大な、しかも貴重な民族遺産である複製版資料が滔々と出版されている今日、公共図書館の社会的、文化的役割は大きな改変を迫られている。文化行政を担当する当局がこのような情勢の推移を先取りして、もっと積極的に公共図書館を拡充してほしいとつくづく思う。

県図書館協会郷土資料小委員会の

発足と活動状況について

委員長 瓜 生 守 邦

小委員会設立の経緯

昭和47年3月5日(日)に開催された「昭和46年度福井県図書館活動研究大会」において、「郷土資料の収集と利用について」を研究テーマとした第2分科会で「郷土資料館の設立」、「郷土資料総合目録の作成」が論議的となり、その目的達成のため専門委員会を作るようにとの意見、要望が参会者から出された。6月28日開催の県図書館協会理事会において、上記の要望にこたえて郷土資料に関する研究小委員会を設置すること、その構成等細部は協会事務局に一任することが可決され、10月21日に小委員会が発足した。

その後の活動状況

10月21日に初会合を、11月15日に第2回小委員会を開催した。その主な協議事項は下記のとおりで、現在はそれらの研究、調査の進め方を検討中である。また11月22日には県文書課保存庫を見学した。そこには膨大な県行政文書が収納されていたが、いわゆる官公庁での永久保存資料は、文書館で郷土資料として収集保存しようとするものとは必ずしも一致するものでなく、焼却されるものの中にも多数の貴重資料が含まれていることを知り、困難な仕事だが保存基準の作成を急がねばならないことを痛感した。

記

1. 古文書・公文書(行政文書)の収集保存について
 - (1) 文書館の設立
 - (2) 公文書の図書館保存基準の作成
 - (3) 資料保存者対象のアンケート
2. 郷土資料総合目録の作成について
 - (1) 施設(公共・公民館・学校・大学)対象に資料の所存調査
 - (2) 県下共通の郷土資料分類表の作成

そ の 他

委員会の活動には当然なことながら時間と予算を要する。時間的問題については、委員の夫々が勤務態様の異なる本務を持ち、また諸種の行事等もあるため委員会をたびたび開催することは困難であるので息長く研究を続けていかなければならない。予算的な問題については、11月9日開催の県図書館協会理事会において、昭和47年度事業費のうちの調査研究費1万円を、福井市外に居住し勤務の場を有する委員の車馬賃を含む運営費として使用することの承認を得たが、今後の活動においては、さらに他府県の斯種資料館・文書館の踏査研究などのための予算増額を必要とするが、財源的に困難性が予想され委員会活動に一抹の不安が感じられる。

(3頁より)

務校を有する人から選んだ。いうまでもなく、担当地区内の所在文書について情報を得やすく、また、調査の便宜があるからである。

史料を採訪した調査員からは調査終了後調査書が提出される。調査書には主要史料の目録と史料内容(所蔵者の社会的地位・史料伝来の経過等)が記載されており、福井県の近世史研究に資するよう配慮してある。そして昭和49年度にはこの調査書をもとに「福井県古文書所在調査報告書」を刊行する予定である。

3. 実施状況

古文書所在調査は昭和46年7月から開始し、昨年末で1年9ヶ月を経過した。その間10名の調査員が514カ所の古文書所蔵者を探訪し、224通の調査書を作成してい

る。調査員1名が月平均2.5件の史料採取をおこなったことになり、多忙な校務の余暇利用という条件を考慮すればかなりの成果であったといえる。

各調査員からの管内古文書の分布状況報告を集計すると県下に約1,200家の古文書所蔵者が想定されている。現在の実施状況では予定の3カ年間でこれら所蔵者の総点検をおこなうことは不可能である。しかし、主要古文書の所在を確認しその分布の概要を明らかにすることはできよう。

当館の調査が機縁となり、さらに詳細な古文書の調査・研究がおこなわれ、また、古文書の適切な保存策が所蔵者あるいは公的機関において構えられることになれば幸いである。

福井県図書館協会の歩み

昭和47年

- 6・28 理事会・総会（福井県職員会館）
- 7・7～8 全国公共図書館奉仕部門研究集会（三国町
社会福祉センター）
主題・予約制度について・5事例発表
- 7・18 理事会（芦原・若竹荘）
- 7・22～23 県下読書グループ指導者講習会
講師・森山啓氏（福井県青少年センター）
- 10・11 郷土資料小委員会委員12名入選なる
- 10・21 郷土資料小委員会開催（県立図書館館長室）

11・9

理事会（郷土資料小委員会について報告）

昭和48年

- 1・28 第2回福井県図書館活動研究大会（福井県
県民会館）
第16回読書感想文県下コンクール表彰式
講演・吉村昭氏「私と文学」
3分科会に別れて実施。
- 3・16 昭和47年度県下図書館関係職員研修会
（福井大学附属図書館）

福井県図書館協会役員名

会 長	福井県立図書館長	児 島 幸 男	
副 会 長	福井大学附属図書館長	加 藤 三 千 夫	
	福井県学校図書館協議会長	中 山 弥	
	武生市立図書館長	梶 谷 隆 三	
理 事	三国町立図書館長	徳 照 寿 天 磨	
	福井市図書館主幹	坂 野 睦 男	
	福井県立図書館副館長	印 牧 邦 雄	
	三方町立図書館長	河 原 繁 太 郎	
	敦賀市立図書館長	小 和 田 金 一	
	小浜市立図書館長	安 藤 健 二 次	
	福井工業高等専門学校 事務部長	田 中 敬 助	
	今立町立花筐図書館長	市 橋 甚 助	
	福井大学附属図書館 事務長	瓜 生 守 邦	
	福井県学校図書館協議会 副会長	今 川 俊 明	
	福井県学校図書館協議会 副会長	堀 江 三 郎	
	福井県学校図書館協議会 事務局長	中 野 信 夫	
	福井工業大学附属図書館長		
	農業短期大学 副校長		
監 事	鯖江公民館長	若 泉 喜 一	
	大野公民館長	東 野 太 来	
	仁愛女子短期大学附属図書館長	福 原 一 清	
	福井県議会図書室 調査課長	山 本 栄 一	
幹 事	福井大学附属図書館 管理係長	野 坂 栄 誠	
	福井大学附属図書館 整理係長	葛 西 道 雄	
	福井大学附属図書館 運用係長	霊 河 道 雄	
	福井県立図書館 総務課長	田 中 尚 雄	
	福井県立図書館視聴覚ライブラリー室長	西 畠 良 雄	
	福井県立図書館 整理奉仕課長心得	舟 沢 茂 樹	
常任幹事	福井県立図書館主任司書	広 部 英 一	
	福井県立図書館	宇 野 じ つ	
	福井県立図書館	井 口 昌 一	